

エベレスト遭難

日本人女性がエベレスト登頂に成功したというビッグニュースもつかの間、下山中に猛吹雪に巻き込まれて遭難してしまった。ヒマラヤ登山では遭難のハ割が下山中で、登頂という目標を掲げての登りに比べ、疲労困憊での下りは登りより危険なことはいうまでもない。

プレモンスーン期の五月はヒマラヤ登山好機で、この日には三隊の登山隊が頂上をアタックしていたという。多国籍登山隊の一隊への参加だが、世界の7大陸の最高峰を登頂したベテランの遭難はやはりエベレストは魔の山なのだろう。

登頂は現地時間で十日午後二時半と伝えられているが、三〇〇〇hPaおおよそ高度九・五キロメートル付近と五〇〇hPa、およそ五・八キロメートル付近の1日2回出されている高層天気図をもとに、高度8千メートル付近を推測して十日前後の経過をおおよそ推定してみた。

前日の九日朝六時では風は西よりでかなり強風が吹いていたとみられるが、夕方六時（一八時）には風が急速に收まり、気温氷点下二十数°C。

そして当日の十日の朝六時、西から気圧の谷の接近がみられが、北東400キロメートル付近で風が一〇メートル毎秒以下を考慮すると、エベレスト付近も風が弱く、深夜の登山開始として登山日和となっていたと見られる。

途中のデータはないが登頂後の中の二〇日の夕方六時の天気図では、三〇〇〇hPaや五〇〇〇hPaの等温線や等圧線の動きから、すでに弱い気圧の谷の影響が推測されるデータとなっていた。高山では弱い気圧の谷でも敏感に悪天をもたらす。寒気の南下と夜間の冷え込みで稜線ではマイナス30度近くまで下がり、偏西風の強まりとともに体感温度の急激な低下が進み疲労した身体には過酷と想像される。

昨秋のヒマラヤトレッキング遭難の時は、大雪がどの高度まで降るかがキーポイントだったが、地元ネパールからの気象情報がないとの嘆きが聞こえた。いまやベースキャンプまで衛星経由で情報が届く時代となつているので、工夫次第で危険回避の最小限の多国籍な気象サービスが可能なではなかろうか。

（村松 照男）

